

第一部

『稻葉
佳景』

無駄安留記

調査報告

(邑美郡篇)

如意山養寿院



無駄安留記によると、養寿院については「府下第一の名株なり。巖上に根ざして堀池に匍匐す。数十の枝をつかせ緑色四時おもしろし」というように、臥雲松を称える記述がされている。現在の養寿院はどうなっているのか様々な文献を調べたところ、現在、鳥取に「養寿院」という名の寺院は存在しなかった。『鳥取県の地名』によると、現在の鳥取市湯所町にあった養寿院は如意山と号し、真言宗に属しており、鳥取藩の祈願所とされていたらしい。現最勝院の地にあったが、明治三年（一八七

〇）に、岡山から寛永九年（一六三二）に鳥取に移ってきた最勝院と合併した折に廃された。この文献によつて、現在の最勝院が当時の養寿院だということが分かった。

養寿院の現状を知るため実際に現地に赴いた際に、住職生田観陽さんにお話を伺った。養寿院は最勝院との合併の後、昭和二十七年（一九五二）の鳥取大火で全焼してしまつた。無駄安留記に描かれた絵は焼ける前の姿ではあるが、建物や松の位置はほぼ当時のまま再

現されている。臥雲松は無駄安留記の中でも、「府下第一の名株」と賞賛されているが、当時の松は枯れてしまつたために、現在存在するものは、新たに植えられたものである。しかし石碑だけは当時のもので、石碑の裏に刻まれた碑文も残っており、現在碑文の写しが鳥取県立図書館に収蔵されている。

無駄安留記に描かれた建物は、左から庫裏、本堂、木山堂、鐘撞き堂である。木山堂は有名な建物なので、無駄安留記に描かれた絵と大差ない場所に再建されたものである。現在、多くの地域資料に書かれている「最勝院」は、元々寺町にあった「最勝院」もしくは現在の合併後の「最勝院」のことを示しているものが多く、「養寿院」についての記述は無駄安留記も含め極めて少ない上、存在する資料も不確かな部分が多い。現在では木山堂に願掛けのために人々が頻繁に訪れるようだ。

（安達礼）



愛宕山金剛院

愛宕山は現在の雁金山（二六メートル）である。山下袋川の下流の御乗場の向かいにある畑地を雁金と称することから、古くは愛宕社のある山の下辺りも「カリガネ」と称し、やがて同山の名も雁金となったともいう（『鳥取県の地名』より引用）。金剛院は雁金山の山腹にあると無駄安留記には記してあるが、実際は山麓にあったと推測される。『鳥府志』により、その当時の位置がうかがえるが、今はその地には跡形も無い。『因幡志』によると、雁金山は、丸山と久松山との間にあり山頂には「雁金尾山城」が築かれていた。城というものの、砦規模であったが丸山の出丸と本城を連絡する要害であった。天正九年（一五八二）の羽柴秀吉による鳥取攻め、いわゆる「鳥取の渴殺し」と呼ばれる鳥取籠城戦が行われ、落城の決め手となったのが雁金山尾根での激戦である。兵の奮戦及ばず、寄手秀吉方の宮部善祥坊により道祖嶮^{さいのたけ}が落とされ、吉川（毛利）方は鳥取本城と雁金山城、丸山城の二つの出城との連絡が切断されてしまった。

道祖嶮は湯所から円護寺へ越える峠である。ここに宮部善祥坊が陣小屋を構え、空堀を掘って久松山の重要な尾根沿いの糧道を絶ち、また補給路である旧袋川水路をも押さえた。この道祖嶮切りが久松山の兵糧攻めを決定したのである。

金剛院は鹿野から雲龍寺の愛宕を移したもののより端を発するとされている。また、本尊の千手観音は行基の作であるとも伝えられている。しかしそれは、金剛院の正式名称が金剛院將軍寺であり、また本尊が大権現と名づけられていることから、幕府に関係する寺としての権威付けであったと推測される。本尊については、元は八頭郡新興寺村に鎮座していたものだという説、あるいは鶴殿家の家来である市橋十左衛門山がそれを作って奉納したものだという説があるが、実際のところは不明である。

金剛院は幕府や鳥取藩と密接な関係をもっていたことが種々の資料か

らうかがわれる。たとえば、元禄年間（一六八八―一七〇四）には知足院（現在の筑波山神社の場所にあった。山は江戸城の鬼門にあたったことより鎮護の霊山とされた）の「火の御番」という役職の者が、金剛院が勤務励行であるとの理由で、本院の愛宕堂を修理させたとの記録がある。

その一方でこの寺は、民衆にも親しまれていた。『遺藁』によると、会式の前日には雁金山に万燈を捧げ、その様子を賀露で船遊びを兼ねて楽しむという風習があった。その遺風は天明頃（一七八一―一七八九）まで残っていたようである。さらに、会式の火には相撲が行われていたとされる。また、『上雪』による金剛院へ丑の刻参りに行く女の様子や、女の懸けた呪詛の失敗話が『鳥府志』に詳しく記されている。雁金山の神木に釘を打った跡などから、少なくとも安永年間（一七七二―一七八二）までは、丑の刻参りの舞台とされていたらしい。

余談ではあるが、現代でもわら人形に呪いをかけるといふことを

行う人がいるらしい。呪怨社という会社では、わら人形を販売しており、一九九四年から二〇〇〇年までに約二千四百体の人形が買われたそうである。しかし、現在は倫理上の問題が生じたのか、販売中止となっている。

現在、頂には昭和一八年（一九四三）の鳥取大震災と昭和二七年（一九五二）の大火災の傷跡を癒し鳥取市に平和をとの願いの平和塔が建てられている。また、雁金山は国有林（鳥取自然休養林）となっている。雁金山はハイキングコースでもあり、山頂までの道のりは、愛宕神社から鎮守の社を通って登る方法や、円護寺隧道南口上に出、稜線直下の左斜面の巻道を過ぎ、道祖嶺城跡を通る方法がある。

（小川 千賀子）



荒神社

荒神社は湯所村の産土神であり、現在は湯所神社と名前を変えている。無駄安留記以外の地誌には記載が少なく、『因幡志』、『鳥取県の地名』に記載されているだけである。特に記載が多いのが『鳥府志』であり、氏子の範囲や正月の祭りの様子などが詳しく記されていた。逆に「因幡志」には荒神社についての詳しい記載はなく、湯所村と円護寺の項にわずかに記載されてあるだけである。



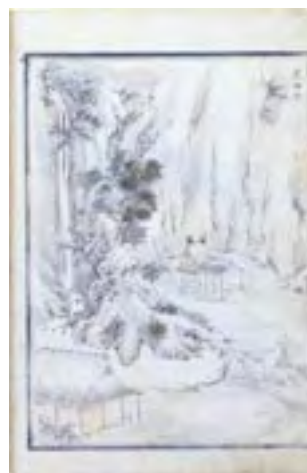
荒神社はもともと養寿院の境内の中にあり、移転された後の現在の荒神社は養寿院よりも下の方に位置している。荒神社は天徳寺の境内にあったという説もかつては存在していたようだが『鳥府志』はその説を無根の妄談として切り捨てている。現在伝わっているのは養寿院の境内の中に荒神社があったという説である。

無駄安留記には次のように記載されている。

祭神素盞鳥尊稲田姫命

なり。祭日正月廿八日。

養寿院の下、岩壁の側に鎮座。是湯所氏神なり。境内瀑布。堀泉水なり。



無駄安留記では祭日は正月一八日になっているが、『因幡志』では祭日は九月一八日、「鳥府志」では正月一八日と九月一八日の二日となっており、記載に相違があるが、恐らくは正月一八日と九月一八日の二日に祭りが開かれていたのではないか。

実地調査の際、社の裏の岩壁から水が染み出しており、位置的にも恐らくこれが無駄安留記に記された瀑布のことであろうが、絵に描かれていたのは巨大な滝であり、似ても似付かないものであった。無駄安留記の絵は忠実に描かれず誇大表現されたものが多い為、荒神社の瀑布もそのように描かれたのだろうと推測することもできるが、荒神社の絵は実際の景観とあまりにも異なっており、無駄安留記作者が訪れた時代と現代とは景観そのものが大きく異なっていた可能性もある。

堀泉水の記述に関してであるが、社の周りにそれらしき物は発見できず、唯一荒神社に隣接する家屋に泉水らしきものを見ることが出来た。

(神垣 浩平)

吉川氏古墳

(村ヨリ谷ノ奥) 田圃のなかにあり。谷奥の方なり。是吉川氏の古墳也と。

苔むしろ人まち顔の友つるに きてなくものは谷の鶯

左の山の端に石祠を祭る。瘡の神なりと。



以上が無駄安留記の記述である。この古墳は円護寺にある。二基の墓が並んで建っており、うち片方が吉川氏の墓である。もう片方は家臣の墓という説もある。吉川氏とは吉川経家のことである。経家は有名な人物で、いたるところに資料が残っている。

吉川経家は戦国時代の人物である。この頃の中国地方は毛利氏の勢力下であり、鳥取も例外ではなかった。これに対していたのが織田信長とその家臣羽柴秀吉である。織田勢にとって、中国地方の入り

口である鳥取の攻略は今後の戦略に大きく影響するものであった。羽柴秀吉は姫路に拠点を置き若桜城、鹿野城を次々と攻めおとした。更に、浦富の桐山城を押さえ海路を断った。鳥取城の山名豊国は始め毛利氏に組していたが、秀吉が降伏すれば因幡一国を与えようと懐柔を試み、同時に降伏を拒めば人質を殺すと脅したため、天正八年（一五八〇）九月二一日中村春統・森下道誓の意見を斥け秀吉に降伏した。春統・道誓兩人はこの態度を遺憾として、鳥取城より豊国を追放し、鳥取城番を毛利氏の山陰経営の責任者であった吉川元春に請願した。元春はまず若桜城番の牛尾元貞を入城させた。元貞は各地で連戦し活躍したが、但馬の諸奇城攻戦の際に負傷し、治療のため出雲の居城牛尾に帰った。続いて元春は市川雅楽允・朝枝春元を入城させた。しかし春統・道誓らは、鳥取城将は秀吉の大軍を受けて城地を死守すべき大任を負うものなので、吉川氏と同姓で勇猛果敢な英傑の派遣を請願した。そこで元春は天正九年元日、石見国福光城主吉川経安の嫡子経家を派遣することを決め、因幡平定の暁には、同国内に料所六〇〇石の地を給与することを約束し激励した。経家はこれを受諾したが、彼がこのとき既に死の覚悟を固めていたことは、彼が長男亀寿丸に宛てた天正九年二月二六日付の、讓状と置文からも察せられる。またこの文書により、経家が同日福光城を出発したことが分かる。従う者は今田宗与・朝枝春元・森脇内蔵大夫・野田春実・

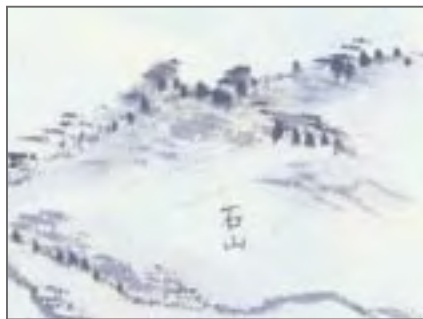
武永四郎兵衛以下将兵四〇〇余人であつた。経家は掛屋（島根県八東郡東出雲町）より海路賀露に着き、三月一八日巳刻（午前一〇時）鳥取城に入つた。経家は鳥取城に入ると、直ちに賀露と鳥取の中間に海上よりの救援補給の受け口として丸山城を構築して、山県左京進・奈佐日本助・佐々木三郎左衛門・境与三右衛門ら五〇〇余人で、これを守らせた。さらに鳥取・丸山両城間の要衝、雁金山には塩冶高清を駐在させ、賀露港内には、常に大船を準備して、海路安芸との連絡を保つた。鳥取城は久松山の上であり、堅城として名高いものであつたので、経家は春統・道誉と共に決死の籠城につとめた。しかし、貯蔵する糧食はわずか二・三カ月維持できるほどのものであつたので、至急兵糧を補給する必要があつた。しかしこのとき既に、秀吉が因幡の穀物を高値で買い占めており、国内で確保できる糧食は高価かつ少量であつた。天正九年六月二五日秀吉が二万の大軍を率いて姫路を出発、七月一二日に太閤ヶ平に本陣を設け、陸路・水路を封鎖し七月一二日に鳥取城を完全に包囲した。そして秀吉軍宮部継潤が雁金―鳥取間を分断し、鳥取城を孤立させた。補給の道を断たれ兵糧の尽きた鳥取城の将兵は窮乏し、餓死者が多く出たという。のちにこの戦が「渴え殺し」等と呼ばれるのはこのためである。経家はこの状況を見るに忍びず、家臣野田春実が開城の交渉を命じた。秀吉側は開城の条件を三点提示した。森下道誉・中村春統の二人は主君（山名豊国）に不忠の罪人であり、その上その逆心によって因幡・但馬・東伯書地方に動乱が起るに至つた罪によつて切腹すること。丸山城に立てこもつてゐる塩冶高清・佐々木三郎左衛門・奈佐日本助の三人は、山賊・海賊として、その罪は重いのでいずれも切腹すること。経家を初め、芸州より加番の侍は、皆その生命を助け、下城させること。この条件に経家は反対した。春統・道誉は山名氏には不忠であつたが、毛利氏には人質をな

げうつても尽した忠臣である、一時でも鳥取城を預かつた身として責任のすべてを負つて自刃する、というのである。秀吉は、経家のような名将を亡くすのは惜しいとしてなかなか承諾しなかつたが、どちらも頑として譲らず、ついに秀吉がこれを承諾した。天正九年一〇月二五日寅刻（午前四時）城内の真教寺に入り、検使堀尾吉春の臨席を請い、杯を干し、具足櫃に腰をかけ、辞世二首を詠み、介錯人静間源兵衛に向かつて「信長の御覽にいろ首であるから能く打て」と命じ、堂々とした最期を遂げた。

吉川経家に関するものだけでも『因幡民談記』『鳥府志』をはじめ、多くの資料が残っており、戦の布陣の様子まで詳しく分かる。この事件が歴史的、文化的に重要であるという事実が分かる。しかし、無駄安留記には墓の様子が記されているのみである。著者は因幡生まれで秀吉の鳥取攻めや経家のことは知っているはずである。ここにも風景のみを重視した編纂の特徴を見ることが出来るのである。

（山本 香織）

石山



石山は、現在の渡辺美術館のすぐ裏に位置する。無駄安留記では「善久寺境内 秋葉山溜池」と記された絵の中に描かれている。ここは、無駄安留記の絵と現在の様子が全くと言っていいほど変化していない。これは、無駄安留記の中では非常に珍しいことである。

さて、この石山に関する記述であるが、本文には「此山谷所々に穴あり。夏の日も中に居れば涼冷として気疎し」とある。なるほどここに並ぶ山は木々が生い茂っており、夏には日陰が広がっているはずであるし、その上、穴の中に入れば涼しいはずである。

また、「切石を巧」とあることから、どうやらここで石切を行っていたようだ。そう考えると、ここは単に石を切る場所という意味で筆者は

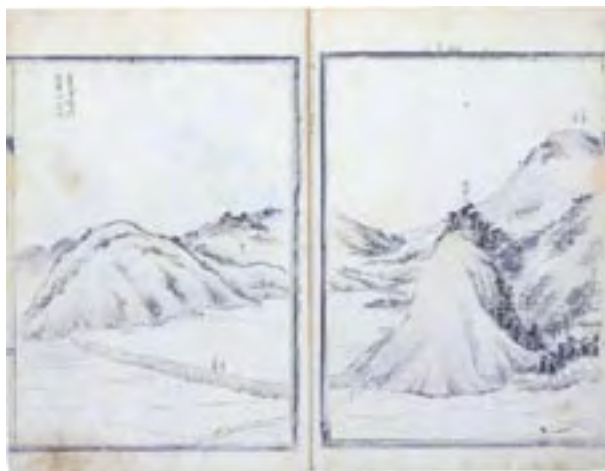
善久寺秋葉大権現

無駄安留記には、

山の端に堂あり。山下溜池景色よし。是頂より、堤の緑草水上の清風、佳景もつとも面白し。向の山下に石山路あり。又水際に水玉草生る奇なり。

と記述されている。

善久寺は池田藩家老倉吉荒尾家により、荒尾善久をはじめ善次等の先祖の供養のために立てられた寺院である。倉吉荒尾家とは、池田家に仕え、外戚として重く用いられていた一族で、その成り立ちは次のようなものだ。織田信長の弟である信時の内室であったのが木田城主荒尾善次の娘であった。三方ヶ原戦いで嫡男である善久を失っていた善次は、娘婿の二男である池田輝政（幼名・古新丸）を



石山と呼んだのかもしれない。恐らくなお今も石山と呼ぶ人はいないだろうし、様々な文献を調べたが、石山という名称で載っているものはなかった。作者の用いたその場限りの呼び名である可能性は高い。石山と同じ場所にあるにも関わらず、秋葉山溜池に関する記述のあれこれにも、石山の記述はなかったほどである。

そして、この渡辺美術館周辺である覚寺は、平凡社の『鳥取県の地名』によれば、「藩政期には覚寺石（角寺石）と称する加工しやすい石材を産出していたが、明治以後はセメントの出現により衰微した」とある。また、この石材は円護寺石とも呼ばれ、当時の覚寺村の南、円護寺村でも石切三人が覚寺村での石切を願い出、二年間の採掘が許可されたそう。もしかすると、この採掘はここ石山で主に

行われたのかもしれない。また、無駄安留記が成立した明治初期には、セメントはまだ見られなかったから、作者はその衰微など予想だにできなかっただろう。

石山をげむおう持て打見れば

片われ月ぞ空に残れる

（前川 裕次）



養子に望み、池田輝政は五歳にして木田城主となり、荒尾家も代々池田家へ仕えることになった。

善久寺は、最初は宝永六年（一七二〇）に、倉吉荒尾家の菩提寺である景福寺の願いで現在の新品治町^{ほんじ}である大森町に建立されたが、享保一二年（一七二八）に丸山に移された。現在の丸山には八幡池の堤防のみが残っており、寺院は新品治町に残っている。

『鳥府志』に、「古名は丸山のつづみと云。雁金尾の東べらの谷あいにある。大なる事、他に比類稀なり。凡幅八十間、奥行三丁ばかり可シレ有ル。蓴菜の名物なり。景色の地なれば、遊客来て情を慰むる所也」『鳥取案内』に、「善久寺の堤は古名は丸山のつづみといへり雁金尾の東の谷あいにより勝景の地にして遊覧するもの多し」という記述が残っているように、昔は景色がよく、観光に来る人が多かったようであるが、現在は渡辺美術館の裏に位置し、周りも柵で囲まれるなど行きづらくなっていて、釣り人が稀に訪れるくらいになっている。

また秋葉大権現も今は残っていないかった。もともと秋葉山とは「秋葉山三尺坊大権現」という火防^{ひふせ}の神様がいた山で、静岡県周智郡春野町にある。秋葉信仰は火防信仰の一つで、火災を押さえ、防ぐ力をもつものとされたようだ。近世には貞享二年（一六八五）から流行神として庶民の間に広まり、伊勢参りに付随するように秋葉参りが盛んになった。

鳥取藩政資料の「在方諸事控」には、天保三年（一八三三）以降たびたび火防祈祷が執り行われたという記述がある。

（米村 祐紀）



戦場ヶ平鵜尾 せんじょうがなるひよどりお

戦場ヶ平鵜尾は、他の地誌で「丸山」「向丸山」「千本末」などと呼ばれている。戦場ヶ平という名称は、無駄安留記でのみ使われている。現在は山の名前としてではなく、この山周辺の地域の名称が丸山として親しまれている。

『鳥府志』と『因幡志』にもこの山の全貌が描かれている。特に『鳥府志』に描かれた戦場ヶ平の図は、無駄安留記の図とよく似ていて、同じ向きから描かれたものだと思われる。『因幡志』では、戦場ヶ平は、「塩治周防奈佐日本之助之墓誌」の背景として描かれている。

他の山々から離れて、平地のなかにひとつだけ存在する山で、現在の国道九号線に沿っている。かつては周囲を田園に囲まれていたようだ。現在は、開発が行われたため、半分以上が住宅街になっている。田んぼも残っており、昔の風情も多少残っている。

この山の頂上では、秀吉が鳥取に攻め入ったときに、但馬の国の大将であった奈佐日本之助と、雁金山で応戦していた塩谷周防





のふたりが、これに応戦した。しかしいずれも敗北し、その後、鳥取城の落城と同日に、ふたりとも自害している。

無駄安留記では、山のふもとにあった川童地蔵が、合戦に破れ、自害したふたりの墓であるように書かれている。『因幡志』にもそのように書かれているのだが、岡島正義は『鳥府志』で、それはまちがいだとしている。岡島正義は『鳥府志』の著者である。川童地蔵は現存せず、川童地蔵があつたと思われるところに、近年たてられた、奈佐日本之助と塩谷周防の慰霊碑がある。川童地蔵は『鳥府志』にも図が描かれている。

『因幡志』によると、戦場ヶ平は、急で険しい山で、夏になると蛇が出たために、好んで入るような人はあまりいなかったようだ。だが、無駄安留記の記述には、「この頂に置酒して脚を息ふ」とある。他の人が行かないようなところで、酒を飲んで楽しんでいるのが、実に無駄安留記の著者らしいと思う。

(井七恵)

図は上から

「丸山」『因幡志』より

「丸山」『鳥府志』より

「川童地蔵」『鳥府志』より

(以上、いずれも鳥取大学図書館蔵)

「川童地蔵」『無駄安留記』

念仏橋

念仏橋は、無駄安留記によると「覚寺の路にかける小橋」と記述されており、明治三年の地形図と現代のものを照合してみると、おそらく現在の国道九号線バイパス覚寺入口あたりにあったものと推定される。また地元の人では、昔はそこに確かに橋がかかっていたというから、ほぼここに念仏橋があったとみてよいと思われる。念仏橋がかかっていた川は、大正・昭和間に流れが変わられ、また、現在その地は道路や住宅などが建設されているため、かつての様子を見ることはできなくなっている。

ちなみに、同名の橋が現在の福部町細川にあった。『鳥取市史』によると、「浜坂から砂浜を横切つて浜湯山を経、念佛橋を渡つて細川に至る。」と記述されている。かつて細川村を通る川（塩見川）には橋がなかったが、但馬往来を越える橋として寛保二年（一七四二）に蒲生村（現・岩美町）の立山から用材を調達して造営されたものであるとされる。また、念佛橋の名称の由来は『因幡志』の「昔は歩渉なりしが近代この里に道心者念仏を唱し諸方を権化して板橋をかけば、念仏橋というなり」という記述からうかがわれる。現在もこの念仏橋の跡は残っており、塩見川の中に橋の兩岸の木の杭が何本か頭を出しているのが見える。

（小川 千賀子）

五智庵

五智庵は、現在の覚寺公民館となつて新たな歴史を刻んでいる。公民館は二階建てであり、一階部分は庵の面影を残し、中に数体の仏像が安置されている。無駄安留記に「五智如来を安置す」と書かれており、現存のものがこの五智如来である可能性もある。五智とは、密教では仏が具えている五つの智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智）のことであり、これらの智をあらわす仏像が五体安置されていたことも考えられる。また、敷地内に地蔵が多数あり、無駄安留記の「美しき尼」の像らしきものも残っている。

（小川 千賀子）



ままこ 継子落しの滝

「継子落しの滝」という場所をご存知だろうか。この滝の名前、よく考えると怖い感じがしないだろうか？ 継子を落とす滝なんて非常に恐ろしく感じる。では実際、本当にこの滝に継子を落としていたのだろうか。無駄な留記の記述やその他地誌の記述を見ながら考察していきたい。まず、地誌の中にいくつか「継子落しの滝」についての記述があるので、みていく。

『鳥取案内』（鳥取市役所編）より

継子落しの瀧

摩尼寺に詣ずるの道にあり、景致愛すべし、昔婦人あり継子を嫉むこと甚しく相伴ふて魔尼寺に詣ずと伴り、この處に至り之を瀧壺に落して死せしめたるに依て此名を存せりといふ、其附近の路傍に谿流の岩に激し岸を打て長き瀧状をなせる所あり亦一種の勝景なり

続いて、『因幡志』より

村より■（二字分空白）町許り奥にあり摩尼寺へ詣れば道の右手にあり谷川の流れ此處にて小き瀑となる側に不動尊を安置す昔継母一人の継子を具して帝釋へ詣り此處に手水に事よせ継子を此瀑下に落して殺したりと隣邑圓護寺に継子谷と云ふあり是も継子を捨てたる處と云へばさる事もありにしや

さて、これらの記述からどんなことが窺えるだろうか。まず、摩尼寺に行く途中の道の右手にあるということ。実際現場を調査しにいったのだが、その時も確かに右手にあった。

さらに、昔、継子を育てていたある女性が、その子に何らかの妬みがあり、非常に憎んでいた。そのため、参詣に行くと嘘をついて、子どもを連れ出し、この継子落しの滝の滝壺に落として死なせてしまったとい



うこと。非常に悲しい話ではあるが、やはり、子をこの滝で殺してしまっ
たことが、一つの名前の由来と考えられるのではないだろうか。しかし、
実際調査に行った時に感じたのは、思っていたよりも高さが無いとい
うことである。地誌によれば、継子を落とした滝のように書かれているが、
そこから子を落としても死までは至らないような気がした。また、滝の
下流には子を弔う詩が残っていた。継子落しの滝とはいうもののこのよ
うな詩が残っているという事は、誰かこの滝で亡くなった子どもを供養
した人がいたのではないかと考えられる。

無駄安留記の原文にはこんな狂歌が残されている。

御仏の誓ひに洩れぬまま子ならとくひきよたきのしら糸

これはわかりやすく訳せば、仏さんであるなら、とく（早く）、見えな
い滝の糸で継子を引き上げて欲しいというもので、無駄安留記の作者が

滝壺に落とされた継子に同情していたのかもしれない。

さらに、『因幡志』の方には、隣の村の円護寺にも継子谷という谷が
あり、そこも同じように昔継子を捨てたところであると書かれている。
また、滝の上流の方には「鬼八之墓」と書かれた石碑など多くの石碑が
あり、継子落しの滝との関連性が気になるところだ。

また、『鳥取文化観光事典』には、継子落しの滝は「摩尼寺」の欄に、
摩尼寺の付近に存在するというかたちで紹介されている。摩尼寺は鳥取
市覚寺部落から二・五キロメートルの山奥にある。天台宗に属し、本尊
は帝釈天である。承和年間に慈覚大師が開いたといわれている。因幡地
方の住民の崇敬が多く、五月二六日の会式や春秋の彼岸には多くの参詣
の人々で賑う。摩尼寺付近には継子落しの滝のほかにも、道光坊や小泉
友賢の墓、鼠屋大蕨の句碑などがある。

（岸本 芙沙）



峯の立岩・奥の院

鳥取市覚寺集落から摩尼川沿いにさかのぼった山腹に喜見山摩尼寺がある。摩尼寺から山道を登って行くと峯の立岩や奥の院という場所に行くことができる。現在、摩尼寺から奥の院へ向かう道はハイキングコースとなっており、六角堂、展望台、立岩、奥の院の順番に行くことができる。これとは別に、摩尼寺へ登る階段の下のところから摩尼川沿いに南側の谷を進んで行くと、摩尼山へ登ることができる道がある。この道を通ると、ハイキングコースとは逆の順番になる。無駄安留記や『因幡志』には、まず奥の院に到り、その次に立岩に到着すると書かれているので、後者の道を通ったと考えられる。無駄安留記には、「是より山途を行こと凡十町ばかり、左の山谷をじくじく谷といふ。右の路をゆけば、矢谷・八重原など、それより数町、



又左の方を登り、齒朶^{しだいばら}荊棘^{いばら}をわけて九曲して、奥の院の大岩に到る。」とある。じくじく谷という名前の谷が現在も残っているかは分からないが、摩尼川沿いに飛渡谷という谷があるので、この谷がじくじく谷である可能性が高い。

無駄安留記に書かれている道順で説明すると、摩尼寺から山谷を登るとまず奥の院の大岩に到着する。変

わった形をした大きな岩が、絵に描かれているものと同じ様な姿で残っている。無駄安留記には、「巖上に弘法大師不動明王を安置す」とある。現在もいくつか仏像があるが、当時のものかは分からない。絵の中には祠のようなものが描かれているが、残っていない。奥の院と峯の立岩の間の道について無駄安留記には、「小篠・齒朶^{ささ}をわけてのぼれば、狙^さならましかばとおもふばかり、山深く、樹の枝荊棘^{さく}を潜りて」と表現されている。現在はある程度道が整備されており、所々に階段が作られているが、非常に険しい道であった。

奥の院から五分ほどで、峯の立岩に到着する。ここは帝釈天出現の地といわれており、帝釈天に関する伝説が残っている。昔、現在の湖山町にあたる小山村に、産見長者という人とその妻が暮らしていて、子供がなかなか出来ないことを悩んでいた。そのことを円護寺の大日如来に祈願したところ、妻が身ごもり、きれいな女の子が生まれた。しかしその娘が八歳になった年の六月に突然いなくなってしまう、夫婦は必死で



奥の院



↑ 立岩からの眺望 奥の院 →→
← 帝釈天像 峯の立岩 →

探した。夫婦がある日喜見山の頂上に登ったところ、突然一人の美しい天女が現れた。長者がよくみると、その天女が娘であった。六月末になると、喜見山にある立岩の頂に立ち、帝釈天に姿を代えたと伝わっている。立岩の上には、伝説となった帝釈天の像がたてられている。また、円護寺の大日如来は、無駄安留記の別の箇所で「是往古産見長者一子を授かりし靈仏なり」とされている。

無駄安留記の立岩の絵には、筆者の従者と推定できる人物が岩の上へ登ろうとしている姿が描かれている。数年前までは、岩の頂上まで登れるようにしてあったそうだが、現在は登ることができない。無駄安留記には「からうじて頂に登れば、大日如来・石尊を安置す」という記述がある。像は見当た

らなかったが、石で出来た台座のようなものを見つけたことができた。立岩付近からの眺めは、無駄安留記の筆者も書いているよう

に、まさに「海陸遠望絶景筆に尽くしがたし」である。海や周りの山々など、遠くまで見渡すことができる。

峯の立岩の下には、賽の河原がある。無駄安留記の中には、「岩下に財の河原とて小礫を積だり」という記述がある。賽の河原とは、三途の川のほとりにあるといわれている場所である。親より先に亡くなった幼い子供は、本来なら不孝の罪によって地獄に行くところが、幼少のため賽の河原にとどまり、小石を積み上げるといふ伝説がある。摩尼寺がある摩尼山は、古くから亡き人の靈魂が集まると信じられていて、子供の靈魂についての信仰は現在でも強く生きているそうである。我が子を亡くした親たちが、奥の院の立岩に至る道に祀られている墓標の石仏や、石地藏を拝みながら登ると、そこで必ず、我が子にそっくりの石地藏を見つけることができる」といわれている。

無駄安留記に描かれている奥の院の大岩と峯の立岩の絵は、どちらとも現在の状態とよく似ていた。筆者は、実際にそれらの場所を訪れて絵を描いたのだと考えられる。

(松井 陽子)



峯の立岩

児ちごケ松

児ケ松は、摩尼寺より福部村に抜ける林道にあるとされている。『無駄安留記』の記述は以下のようである。

源兵衛茶屋の向、仁王門の左の路を下りて、谷より登ること二三町、頂に在りし由。今は名のみなり。湯山池の眺望無双の佳景なり。

おのづからは、その風も通ふらし 尾上に児がまつと聞くより

無駄安留記の著者が歩いたルートは、「仁王門の左の道を下りて、谷から二、三町ほど登る」ということだが、「仁王門」とは摩尼寺の参詣階段を登る途中にある門のことである。文禄三年（一五九四）に建てられた、摩尼寺の建造物の中で最も古い建物である。島根の焼火神社から移転されてきたものだと伝えられている。また、無駄安留記によると、児ケ松からは湯山池が見えた、ということだが、湯山池は現在の福部鳥湯山、旧浜湯山・山湯山にまたがる池のことである。『因幡志』に「周回五十町なり」とあり、かなり大池だったようだ。新田開発に力を入れ始めた享保の頃（一七二六～一七三六）から湯山池の干拓が始まり、昭和三三年（一九五八）の干拓により現在では完全に消滅している。この絵がかかれ



る以前にも何度か干拓工事が行われており、文政二年（一八一九）に二五町、約二五ヘクタールの新田が得られる大規模な工事が行われている。このことから、この絵のように巨大な池が残っていたとは考えにくい。湯山池を語る上で、宿院義般の存在を欠かすことは出来ないだろう。砂丘に近いという立地条件から、田畑が砂によって埋没し始めていた。この不安定な田地をどうにかするため、安政六年（一八五九）湯山池開拓が計画された。西方にある多鯰池に水を引き湯山池を干拓するというものである。工事は困難を極めたが、ついに多鯰池と湯山池を繋ぐ水路が開通した。これを完成させるために義般は文字通り心血を費やした。これも彼の愛郷心の強さ故なのだろう。

『因幡志』に「児松」という名とその由来を語る伝承を見つけたことができた。このことから、実際に児ケ松が存在するということ、その場所が覚寺にあることが確認できる。しかし、本文に「今は名のみなり」とあり、絵中の松の上にも「児ケ松古株」と書かれている。『無駄安留記』の成立は一五〇年前なので、児ケ松は枯れた、もしくは伐採されたと考えるのが妥当だと思う。この児ケ松を見ることができた道は摩尼山と湯山を結ぶ山道で、福部方面からの参詣道でもあった。もし本当に絵のような景色を見ることができたなら、長い山道の疲れを癒す名勝であったことであろう。

（山本 香織）



源兵衛茶屋

まず、絵と写真を見比べてみると、現在の写真の右側には門脇茶屋、真ん中に摩尼山へ続く階段、左側に源平茶屋（現在は「兵衛」ではなく「平」となっている）があり、無駄安留記の絵の三つとの位置関係が少しおかしい。しかし、このように変わった視点で描かれている絵は無駄安留記ではそんなに珍しいものではない。

さて、ここで『鳥府志』の記述である。「摩尼山の麓なる源兵衛茶屋



も世に隠なかりしかば時の童謡に摩尼に丸山喜三郎源兵衛と唄ひたりし」とある。これは丸山の三軒茶屋に関する記述で、そこにも源兵衛といった名の繁盛した店があった。しかし、この無駄安留記で紹介されている魔尼山のふもとの源平茶屋が「世に隠なかりしかば」、つまり有名すぎたため、三軒茶屋の方の源兵衛はわざわざ「摩尼に丸山喜三郎源兵衛」と童謡で唄わ

せ、二つの源兵衛を区別したそう
だ。

無駄安留記には、この源兵衛茶屋の蒔蒔の田楽が、「名物ながら味なし」とある。実際に食べてみるととてもおいしいものだったし、店のご主人に聞いても、田楽の味はずっと変わっていないはずだということなので、どうしてこう書かれたのかはわからない。作者が味音痴なのか、それとも味噌をつけずに食べたのだろう。しかし、味なしなんて書くのだから、作者は本当に思うままにこの無駄安留記を書いていることがわかる。

いにしへを捨てずにさすが田楽の 黒の串竹幾世経ぬらむ

これが無駄安留記に載っている狂歌である。無駄安留記が書かれた幕末から明治初期の頃で「既に幾世経ぬらむ」なのだから、今現在で考えると相当歴史の古いものであるように思われる。また、現在は田楽に使用されている串竹は黒くなっていない。ご主人は実際に山へ竹を選びに行つて、それを切つて串を作つておられるそうだ。

（前川 裕次）



大応寺観音堂

大応寺は、永平寺と総持寺を本山としている寺で、現在の鳥取市浜坂にある。「坂の観音」や「水月庵」と呼ばれて人々から親しまれてきた。

大応寺の縁起である『転法輪』には、大応寺の始まりは大同二年（八〇八）に僧延鎮の開山で円城寺と号し、延鎮作による十一面観世音菩薩を本尊として、当時は寺坊十有余を有する大伽藍だったと記述されている。『転法輪』によると、その後天正九年（一五八二）の羽柴秀吉による鳥取城攻撃の時に戦火にあい十有余の堂塔は燃えてしまったと記されているが、大同二年から天正九年の間の記述はなく、また円城寺のあった位置もはつきりしない。

当時の縁起である拾遺書詳しゅういしやうという書物を参考にして書いたと思われる無駄安留記上巻の浜坂観音についての記述にも、「大応寺之観世音堂ハ大同二年開基」と記述されている。しかし、無駄安留記の拾遺巻に、「何の書に伝えにしや」とあり、縁起の記述は何の資料を元に書かれたものなのかはつきりしていない。

今の場所到大応寺の前身といえるものが建立されたのは、貞享頃（一六八四～一六八七）のことで、当時は小さな庵のようなものだったようだ。この庵は、当時の本尊であった観音像を安置するために建てられるという、変わったきっかけにより建立された。それは、この寺の呼び名である「浜坂の観音」のもとにもなっていた、当時の本尊の観音像に関する話として伝わっている。この話は、様々な資料に記載されていて、その内容に大差はない。それは、次のような話である。

貞享のころ、このあたりの百姓が土の中からたくさんの腐りかけた木材を掘り出した。薪にしようと近所の人に配っていると、その中に人間の手足の形をしたものが見つかる。さらに仏像の頭部のようなものが出てきたので、それらをつなぎ合わせてみると驚いたことに観音様の姿になるであった。人々は草庵を建て、仏像を安置した。天徳寺から梅栄ばいえいという僧侶が派遣され、権右衛門という仏師に観音像を修理させたが、できた仏像は頭部と胴体の釣り合いが取れていない不恰好なものになった。それでも仏像は人々の信仰を集め、後にこの地にやってきた石丈せきぢやうという修行僧に観音堂の庵主になってもらった。石丈は周囲の水や石が格別清いことに気を良くして、このお堂に「水月庵」という名前をつけた。これが浜坂の観音堂、現在の靈亀山大応寺のいわれである。

これは有名な話らしく、『因幡志』や『鳥府志』などにもこの話が記載されている。無駄安留記の拾遺巻にも同じ話が載っているが、観



音堂の庵主になった石丈が九州から来たという話や、のちに弟子の高賢が庵主になったなどの話も記述されており、『因幡志』や『鳥府志』など他の資料に比べて詳しく書いてあるようだ。おそらく無駄安留記の作者は『因幡志』や他の資料を参考に拾遺巻の大応寺の仏像に関する話を書き、縁起の記述を元上巻を書いたと思われる。

この寺が霊亀山大応寺という寺号になったのは享保（一七二六～一七三六）になつてからのことである。その後、この寺は複数回にわたつて火事にあつており、現在の建物は昭和四九年に新築されたものだ。話に伝わっている観音像も、残念なことに火事の際に一緒に焼けてしまったようで、現在の本尊は聖観音像といわれているが、いつの時代にどのようなものに変つたものなのか、文献が無くて全く分からないとの事だ。また、本尊の両脇に安置してある等身大の金剛力士像は、元禄一〇年（一六九七）に池田家から寄進されたと伝えられているようだ。

境内に関しては、無駄安留記の上巻に、「境内桜樹数本あり。中春のころは遊客不斷、佳景不尽言葉。堂宇最も美麗なり」と記されているが、他の資料の大応寺についての記述は掘り出された観音像の話がほとんどで、境内の美しさについての記述は無駄安留記以外には見当たらなかった。また、現代の観光案内などにも大応寺は載っておらず、今の大応寺は遊客不斷とはいえないようだ。

（米村 祐紀）



弁天島

弁天島は、旧高草郡秋里村に属していたが、現在の弁天神社は鳥取市浜坂に属する中州の上にある。無駄安留記の本文では「千代川と袋川の合流した流れの中にある。弁天島は老木の松が茂る中に鎮座している。そこには奇岩があり、とても興味を持った。」と書かれている。弁天島の位置は、『鳥取県の地名』の記述では、『寛文大図』では西側に砂が堆積し陸続きとなっているが、『鳥府志』は寛文一三年（一六七三）の洪水で再び中島になったと推定している。」と述べられている。そして現在では、時代の流れによる河川の移動や工事、近隣地域の開発によって、後ろに千代川の見える中州になっている。

また、信仰の対象としての弁天島は、『因幡志』では、「中洲に在。加路縁起曰く、三島大明神の廟所」と言われ、『因幡民談記』では弁財天は高草郡秋里村にある三島大明神（現・荒木三島神社）の廟所と述べられており、『鳥取の地名』には、「国衙と密接な関係をもつ重要な神社で、加呂社（現在の加路神社）などとともに水上交通に関する神であったと考えられている」と書かれている。

実際に訪れた弁天島付近では、水上交通は見られなかったものの、この地域の水上交通に関する信仰の歴史は古いものらしく、平成元年に行

われた西階竹の調査では、それまで不明であった弥生時代後期の遺構が検出された。多量の弥生土器とともに管玉未製品、船戴の内行花文鏡片が出土し、その遺跡は河口から約二キロ千代川をさかのぼった川岸に位置していた。このような立地・遺構・遺物から、航海の安全など、水に関連する祭祀遺跡であると考えられ、その遺跡地内には、近年まで宗像三女神を祀った三島神社（現・荒木神社）が鎮座していたという。

三島大明神・荒木大明神ともに、明治初年に三島神社・荒木神社と改称されている。『鳥取県の地名』によると、昭和九年（一九三四）以降に両社は合祀され、荒木三島神社と改称された。現在三島神社の旧地に小祠が設けられているとのこと、この小祠が「弁天の祠」ではないかと推察される。また『鳥府志』では「弁財天社があり、風光明媚な地であったため夏には遊船が絶えず、因幡の人々は好んで詩歌に詠んだ」とある。昔は観光の地であったと考えられる弁天島も、現在では周りを田





図は『因幡志』より

と山の木々に囲まれ、一見しては分からないような状態で建っている。また弁天島は、羽柴秀吉の鳥取城攻めのおり、加露沖から千代川をさかのぼり、鳥取城に至る毛利方の武器兵糧の補給路を断つため秀吉配下の船大将、吉川平助が陣所を構えた地ともいわれている。

次に、無駄安留記本文に書かれた「老松」については、『鳥府志図録』では、弁天島は「弁材天嶋」の名で書かれており、「松の木の下には砂浜があり、そこに船を繋いでおき、女性や幼児、少年などが遊ぶ姿が描かれている。しかし月日は流れ、嶋の上には竹が生い茂り、足の踏み入れる余地さえなく、狐や狸の寝床となつて、神社の有無さえ知る人がいなくなったのだが、近年ある人が信心を起こし、荒れた竹の密林を刈り払い、弁財天の社を修繕したので、船を使って参詣するようになった。この嶋の四方へは古い松の枝が垂れ、水面を陰覆して、風景が珍しく素晴らしいので、夏の日にはこの周りでは一日中遊船が絶えない」とある。

水面に垂れるほどの大きな松は現在では見られなかったものの、この文章に表された松が無駄安留記の本文の「老松」だと考えられる。最後に、無駄安留記に書かれた狂歌に注目してみる。

島姫の水の調べに合わせつつ 琴ひく松の風ぞ涼しき

風光明媚な土地だった頃の弁天の島で涼む作者の心情がよく伝わってくる。おそらく作者は弁天島の風景を楽しみながら、旅の疲れを癒していたのではないかと推察される。現在では、その美しい島の姿に思いをはせることしかできないのが残念ではある。

(安達礼)



荒神山

荒神山は、千代川と旧袋川と合流する位置にある山である。付近の海岸には「小泉」「猫溜」などの古くからの名前もあったらしい。眺めとしても面白いものだったようだ。

現代の荒神山は、千代川に面した部分は、岩がむき出しになっている。採石場であつたのだが、もう採石が終わってしまい、そのままの岩肌が露出した状態になっている。山の頂上には、コンクリートの貯水槽が残されている。最近までここから周辺地域に水を供給していたそうだ。

川で釣りをしている人は見かけなかったが、数百メートルほど離れた、賀露の海では毎日にぎやかに漁業が行われていて、休日には釣り人がちらほらと見かけられる。無駄安留記には「彼方は方の川岸に、釣人数多、漁舟・網打など数しれず」とある。当時はあちらこちらの川岸に釣り人がいて、さまざまな方法で釣りを楽しんでたようだ。絵にも、ふたりが荒神山のふもとの道から釣竿を下げ、ほかに何人かが船に乗って釣りを楽しんでいる様子が描かれている。現在でも、釣竿を下げている人や、網を持った人がいた。

賀露は加路とも書かれる。明治時



代には賀露という表記になり、明治二三年から防波堤が設けられた。昭和二八年に地方港湾鳥取港となり、五年から整備事業が進められた。そのため千代川の河口が移動させられ、新河口西側の埋立地が、港湾施設の中核となった。明治から現代にかけて、このような

変化が起こり、風景は現代的なものになっている。

絵の右下、荒神山の麓の二人が腰掛けている場所も、今ではコンクリートで覆われ、描かれているような素朴な風景ではなくなっている。松林だった部分には、住宅がまばらに並んでいる。ただ、背後の山並みは無駄安留記の絵とよく似ていて、やはりここが描かれたものだと思われる。

荒神山には、二首の狂歌がそえられている。

取りおとすはづみにいふか南無三宝 荒神山の磯のはぜつり

とりに来る鬼もなければ川岸の ひたひにめだつ瘤柳かな

(井七恵)



大井古小井古

大井古・小井古は俗に「大播鉢小播鉢」と呼ばれる。鳥取地方では、砂丘が風にえぐられて凹状になったものを、その形状から「スリバチ」と呼ぶ。鳥取砂丘には現在三列の砂丘列が見られるが、その陸側にはスリバチがでやすい。浜坂地区でのスリバチは底部に湧水をもち、季節によつては池ともなる。これらは時に「浜坂スリバチ」や「浜坂オアシス」と称される。大井古・小井古もその類であつた。

『因幡志』によると、「昔多鯨池の近辺近き沙漠の中に大なる池二つ有りて、大井古小井古と言ひしとぞ。百年計り前迄も沢の形有りし由、今は大播鉢小播鉢とて沙漠の中に窪みたる所あり。是其址という。此辺の沙山を古井古坂、小井古坂といふはその池の名より出づ」と記されている。『因幡志』の成立が寛政七年（二七九五）であることから、一七世紀末頃までは大井古小井古は池であつたことが推測できる。また無駄安留記本文に「寛文年間までの池の形がある」と記されていること、そして『寛文大図写』には「大井古」・「子井古」とあり、「子井古」のところが水色で着色されていることから、それが描かれた寛文の時代（一六六一～一六七二）には、小井古は水を湛え池の形を残していたと考えられる。ちなみに、鳥取砂丘の景観が具体的に書かれたのは、この記述が現在是最

も古いものとされている。その場所について、『鳥府志図録』によると、干拓により今は無き湯山池（現・福部町湯山）の北岸沿いの薬師堂に隣接する形で大井古が、当時の浜湯山村に小井古が位置していた。無駄安留記本文中の東濱とは、鳥取砂丘のなかでも、現在の浜坂地区の砂丘地域のことをいった。当時は、鳥取城下町から湯山村に行く際に、必ず大井古と小井古が見られたようである。

しかし砂丘は変動する性質をもち、近世以降その発達が顕著であつたために、現在での小井古の正確な場所の特定は困難である。一方で、大井古に関しては、現在鳥取砂丘のスリバチの中でも最も有名な追後スリバチ（県道二六五号線沿い）ではないかと推定できる。

（小川千賀子）



柳茶屋



柳茶屋は、明治の終わり頃まで浜坂地区に四〇五軒ほどあり、いずれも砂丘の中に建っており、豊富に湧き出る美しい水源を元に茶屋を営んでいた。現在でも、年配の方の中には浜坂といえばすぐに柳茶屋という名前が浮かぶ人もいる。但馬往来浜通り（鳥取城下〰湯所〰浜坂村〰砂丘〰湯山村〰細川村〰駒馳峠〰但馬国）を行き来する人は必ずこの柳茶屋の前を通った

ので、茶屋があつた頃の人にとっては大変馴染みが深いものであつた。しかし、浜坂の柳茶屋は、最後の一軒が昭和一八年（一九四三）の鳥取大地震により水が出なくなり、この地を去つたといわれる。現在はこの柳茶屋の跡も、かなり注意しないと分からない状態になっている。写真で確認した限りでは、浜坂地区公民館の建てた「柳茶屋跡」という小さな立て札があるのみだ。名称としては今も存在して

いる。複数存在した柳茶屋のうち一軒の場所は、砂丘こどもの国の入り口前面にある有島武郎の歌碑がちょうどそれにあたる。「柳茶屋跡」から歌碑に至るまでの但馬往来には松並木があつたのだが、今はこの歌碑のあたりにわずかに数本が残っている。これらの松が「一里松」と言われていたのは、大手橋からちようど一里であつたためである。

さらに、藩主の休憩所としての柳茶屋が天保六年（一八三五）に設置された。茶屋のあつた福部地域が鳥取城下から比較的近く、また自然景観に富んでいるために、藩主一家のレクリエーションの場であつたからである。岩戸（現・岩美町）方面での野掛や遠馬の際に、茶屋が利用されていたという記録が『在方諸事控』に見られる。そして、浜坂地区は従来から武術訓練の場であつたが、嘉永七年（一八五四）のペリー来航に伴う軍事補強政策によつて、同地区は軍事訓練の場と位置づけられた。幕末の文久三年（一八六三）には現在の歌碑の後ろの方に砲台が築かれ、鳥取藩砲台八ヶ所のうちのひとつとして、今は跡地としてのみ残存している。なお、浜坂地区の砂丘は鳥取歩兵第四一連隊の訓練の場所として、戦前・戦中まで使用されていた。現在、同地区に護国神社が建っている。

（小川千賀子）



多^た鯰^ねヶ池

多鯰ヶ池は鳥取市と福部村にまたがる淡水の池である。注ぎ込む川も流れ出す川もなく、鳥取砂丘が谷をふさいだためにできたせき止め湖である。周囲三・四キロメートル、面積〇・二三平方キロメートルで、最大水深は中国地方第一位の一七・三メートルある。かつては池の北側が但馬往来の地となっていた。名前には多鯰や多稔、種の字が当てられたりするが、最も一般的なのは「鯰が多い池」と書いて多鯰ヶ池とするものだろう。

かつては鮒や鯰、鴨が名物であったが、現在は外来魚であるブラックバスを求めてバスフィッシング目的の釣り人が度々訪れる名所であるらしい。また、日本海側では石川県以北にしか分布しないとされていたコイ目コイ科に属するアカヒレタビラが生息しているようである。しかし一九八〇年に生息が確認されたアカヒレタビラも近年池に放流されたブラックバスによる影響のためか、それ以降発見されていない。すでに絶滅したとの見方が強いが、鳥取県はアカヒレタビラを絶滅危惧種Ⅰ類に指定している。

『因幡志』は池内の島として大島、小島、鶴島、ごぜ島の四島をあげていたが、現在、大島は陸続きとなっており、島という形にはなっていない。減水期には沖のごぜ島、磯のごぜ島と呼ばれる二つの暗礁が水

面に姿を現すようである。

『因幡志』にあった鶴島とごぜ島のゆくえであるが、恐らくは時代が経つに連れて、沖のごぜ島、磯のごぜ島と呼ばれるようになったと推測できる。また小島は柿島とも呼称さ

れており、池に伝わる伝説がその語源となっていると推測できる。

多鯰ヶ池を舞台とした伝説が幾つか伝わっており、そのどれもが多鯰ヶ池の主であるとされる大蛇に関係するものである。

一つは、稚児僧に心を奪われてしまった種という名の娘が前世からの因縁により大蛇に姿を変え、摩尼寺の別当の言葉に従って多鯰ヶ池を住処としたもの。

もう一つは、長者の家に仕える多祢という名前の下女が、夜周りの者が食料を求めると決まるところから甘い柿のみをたくさん取ってきた。そのことを不思議に思った若い衆が多祢の後を付けると、蛇体に変化した多祢が池の中の小島まで泳いでいて、小島に立っていた柿の木



から実を取っていたというものである。また、確認は取れていないのだが、この民話には若者達が蛇を助けたという前段があったという。

前述した柿島の由来は島に柿の木があったということに見ることが出来るだろう。しかし現在の島に柿の木はなく、松の木がたっているだけである。また、この伝説と筋自体はほとんど同様であるが、蛇の化身が長者の娘という伝説もある。

無論、多鯰ヶ池という池の名前の由来は稚児層に恋した娘「種」や下女「多祢」にあると考えることが出来る。ところが、「タネ」という名前の人物は蛇の化身だけではなく、池の主である大蛇に雨乞いをした老婆も「たね」という名前であった。

多鯰ヶ池に伝わる大蛇の伝説の代表的なものが上記したものであるが、他にも鳥取城の殿様が多鯰ヶ池に住む大蛇の尾の中にある剣を求めた話や、弘法大師が荒れ狂う大蛇を鎮めて自ら彫った弁財天像を大島に祀ったと話など、多鯰ヶ池には不思議なほど多くの大蛇伝説が伝わっている。事実、一〇年ほど前に、長さが二メートル程の蛇の抜け殻が、大島にある神社で発見されており、伝説上だけでなく実際にかなり大型の蛇が池に生息していたという可能性も完全には否定できない。

ちなみに伝説繋がりではあるが、この多鯰ヶ池は心霊スポットの一つとしても有名である。地元の人に確認は取っていないのだが、かつて多鯰ヶ池では水葬が行われており、それが元で、この地で写真を撮ると池の中から多数の手が伸びている写真が撮れるという話がまことしやかに伝わっているようだ。ただ、この話の舞台となった池は、語られる話の中では、池の中心に鳥居のある深い池となっていて、鳥居がある点が合致しない。大島に鳥居があるが、池の中心とは言い難い。まったくの推測ではあるが、前記した大蛇伝説の中に水中に建てられた鳥居というも

のが存在しており、それがこの話と混ざって、池の中心に鳥居のある深い池という表現が生まれたのではないだろうか。

無駄安留記には、

多鯰池共。ぼじ坂より臨めば、碧水漫々として風景限りなし。弁天島・柿島など、殊に面白し。ここに瓢飲を汲んでしばし憩ふ。

とあり、「ぼじ坂より見た多鯰池の風景が素晴らしく、この地で酒を飲んだ」と、多鯰ヶ池の説明を述べるよりは一種の感想を述べている点が面白いとも言えるし、上記のようなおどろおどろしい伝説がいくつも伝わる多鯰ヶ池をひどくのんびりとした感じに紹介している点で、作者は少しばかり他とは違う感性の持ち主であったと言えるかもしれない。

(神垣 浩平)



もみじ 楓亭

紅葉御殿ト云。萩モ多株植之。小亭雅趣アリ。

見る人におのが錦を奪はれし 昔やいかにかへるでの色

下は無駄安留記の絵である。絵中の「御殿」とは扇御殿かもしれない。扇御殿は、若くして一代藩主池田慶栄を亡くした夫人宝隆院のために一二代藩主慶徳の手によって、文久三年（一八六三）五月起工された。襖や欄間等に扇の模様を多く取り入れたられていたことから扇御殿の名称が付けられた。明治維新後、明治四年（一八七二）に御殿の大半は取り壊され、現在は仁風閣の裏に庭園と宝扇庵（もとの御殿内化粧の間）のみが残されている。この宝隆院庭園は鶴池に亀島を浮かべた幽玄な造りになっている。扇御殿のあった場所には、現在仁風閣が建っている。明治四〇年五月に皇太子殿下、後の大正天皇が鳥取地方に行啓になることになったので、旅館を建築するため土地の使用を池田家に願い出た。池田家では経費が多にかかるだろうから代わって建築してやろうということになり、扇御殿の地を整備し、御旅館「扇邸」を造営した。二階付洋風建ての山陰地方ではじめてのフレンチルネッサン式の建物で、当時、宮内省匠寮の最高責任者片山東熊博士によって設計された。この「御旅館」は随行した海軍軍令部長海軍大将東郷平八郎によって「仁風閣」と命名された。

以来、「仁風閣」と呼び慣らされている。県立博物館の移転に伴い昭和四八年六月に、国の重要文化財に指定、一般公開され、現在に至っている。

絵によると、御殿脇の階段を上ったところに楓亭がある。現在は荒地になっており、建物の跡は見当たらなかった。

鳥取県の代表的な地誌には、楓亭に関する記述は見当たらなかった。その点において、楓亭を取り上げている無駄安留記は特異だといえるだろう。「御殿」が扇御殿であるとすれば、楓亭と扇御殿が建っていた期間は一二年とかなり短い、この間に無駄安留記の著者はこの建物に訪れたのではないかと思われる。

（山本 香織）



太閤ケ平なる

太閤ケ平とは、天正九年、一五八一年に豊臣秀吉が鳥取城攻めの時に本陣とした山である。秀吉は天正八年因幡に出陣し、山名豊国の居城鳥取城の攻略に着手した。九月一日、秀吉は豊国を誘降したが、家臣らが毛利の吉川元春に援軍を要請し、徹底抗戦にでた。その中でも秀吉軍に対抗できる吉川経家があり、互角に戦った。その後、秀吉は鳥取城の力攻めをあきらめ、兵糧攻めを策した。収穫前、六月二五日二千余の兵を率いて姫路城を発ち、但馬国より因幡国内に侵入し、七月一二日には鳥取城を包囲した。その時に本陣となったのが太閤ケ平である。ここより左右両翼と平地に三隊布陣させた。右翼は、秀吉が大平に布陣したのを筆頭に、摺鉢山・覚寺・昼間山・浜坂などに主要人物を配した。左翼陣は、本陣山から芳心寺の上に至る一帯の山々に置かれた。また、両翼の連絡役として、鳥取市街や秋里の方に平地軍が置かれた。秀吉らは、一〇月までの間ここに在陣したという。この辺りについては、『新修鳥取市史』（第一巻）が述べている。

栗谷のつまりに有り、府城山の東に峠そばたたる峯これなり、羽柴藤吉郎秀吉公は此鳥取の城を攻んとて（中略）此山を本陣と定められ、十月までの間御在陣なされたる旧跡なり、今是を御本陣或は太閤ケ平と称ふ、今にも此山上へは土居から堀の跡など厳然と遺れり。

太閤ケ平は、西方に鳥取城を望み、それより左方に芳心寺に至る一

帯の山々をひかえ、右方にははるかに円護寺・覚寺・浜坂・賀露に至る一帯の地方を見下ろし、丸山は眼下に見え、総本陣としては最も適した場所であった。

さて、ここで無駄安留記の記述についてみていく。無駄安留記には次のように書かれている。

百谷路の側二在。高岑也。

ばちならぬふたつの脚で どんどんと登て見ればたいこうがなる

百谷路の方にあり、非常に高い峰である事が記されている他に、無駄安留記の著者が実際に登ったのであろうか、右の絵と狂歌が残されている。「バチで太鼓をドンドンたたくわけではないけれども、二本の脚でどんどんと登っていけば、太鼓が鳴るわけではないが、太閤ケ平に辿りついた。」この狂歌は、本文と絵の両方に記されている。著者の自信作だったのだろう。

（岸本 美沙）



補陀洛山慈眼寺観音院

観音院は東照社（現・榑谿神社）の勧請の後、日光東照宮の意向により、因幡・伯耆の二州の天台宗の院は淳光院（東照社の別当寺）の下におかれ、元々武家の寺であったものが、ここで初めて幕府の管轄下におかれるようになった。開山は備前岡山の光珍寺の専伝である。栗谷に寺地を与えられ、また先に出現した観世音の像を興した。この像は、湯所の山手の高浜十兵衛の家から見つかったものであるとされる。また、伝説では久松山の岩窟より霊光を放ち、そのもとを探ってみると端麗な観世音菩薩像が出現し、それは行基の作であったとされている。

慶安二年（一六四九）からの東照宮勧請の頃、栗谷には御用地となり、上町の現在地に移って、補陀洛山慈眼寺観音院と号した。初代藩主であった池田光仲は、大変観音信仰に篤かったため、観音院を庇護した。また正徳期（一七一一―一七二六）から旧暦一月と九月に城内の祈祷を命じていた。二代目藩主綱清の時世、元禄一六年（一七〇三）九月に中の丸へ祈願札を献上したことが最初で正徳期と、更に池田吉泰の嫡男宗泰の誕生を契機に享保期の二度にわたり三〇俵の米を城から賜り、合計六〇俵の寺領となった。こうして藩の祈願所として、寺格の高い八ヶ寺の中に列した。

また、観音院は因幡地方の順礼の札所の第一番であった。現在も中国観音霊場三十二番札と位置づけられている。本尊である観音像は、藩主





のみならず、庶民にも篤く信仰されていた。観音院は藩の祈願所であることから、夜の参詣は禁止されており、これを黙認した当時の住職が天明四年（一七八四）に処罰されているが、享和四年（一八〇四）よりそれが許可されるようになった。それは、庶民にとつての夜の参詣は、日中の農事に一層の意欲を燃やす励みになる、と藩が判断したためである。その後の夜の参詣者は、境内を埋め尽くすほどであったといわれる。また、観音像は安置される壇が移るたびに大きな寺の本尊となるため、人々から「出世観音」と称された。

観音院の庭園は、江戸時代を代表する池泉鑑賞式であり、昭和一二年（一九三七）に国の名勝指定を受けている。池の右手にある、一基のキリシタン灯籠は県指定文化財である。作庭は、元は慶安三年（一六五〇）頃であったとされるが、現在の庭園の原型となったのは元禄年間（一六八八～一七〇三）の上町への移転に伴う頃であったと推定される。庭全体の簡素な造りに武家書院に多い庭園を感じさせ、現在も植え込みや石組を最小限に抑え、江戸初期の原型が引き継がれている。池は鶴亀と見られる島の配置をしており、柔らかな曲線を描く築山とそれと月を映す池泉とが幽玄の美を創りだしている。昭和一八年（一九四三）の鳥取大地震によって石組が徐々に崩落しており、環境の変化が見られるようになったが、それがかえって趣があるとされた。さらには昭和五九年（一九八四）からの修理により、引き締まった石組となり、その価値をより高くしたといわれている。

（小川 千賀子）



大宝山芳心寺

芳心寺は、もともとは正福寺という名前で、岡山にあった寺院であった。寛永九年（一六三二）に池田光仲の国替によって現在地へ移った。この寺院は池田公とのつながりが深く、池田家を表す揚羽蝶が柱に彫られている。

宝永五年（一七〇八）に鳥取藩第初代藩主池田公光仲の夫人、芳心院（茶々姫）が亡くなり、正徳三年（一七二二）に彼女の分骨埋葬所となった。それによって寺領三〇俵を与えられ、彼女の名にちなんで芳心寺と改めた。その翌年には寺格の高い八ヶ寺のうちのひとつになった。芳心院以外にも、多くの池田一族の女性の位牌がおさめられている。

享保五年（一七二〇）と同二年（一七三五）に火災があり、本堂を焼失している。明治初年に本堂を建て直し、それが現在の芳心寺の本堂である。

築山は山本宗民（珉）作とある。芳心寺の古文書が焼失しているため、山本宗民や、庭園についての詳細は不明である。

芳心寺の庭園は、鶴亀の庭と呼ばれ、現在では鶴と亀をかたどった置石が特徴とされている。無駄安留記では、本文中で鶴亀の庭であることには触れないが、絵の中で「亀形」をした石があることと、池の形が鶴をあらわしていることが示されている。現在言われているものとは





異なるが、昔から鶴亀の庭ではあったようだ。

この庭園には、松の木が使われておらず、とても自然な感じだ。久松山の斜面を利用しているので、さらに自然なものになっている。無駄安留記で紹介される他の庭園と比べると、芳心寺の庭園は決して広いものではないのだが、まとまりがあって風情のある庭園である。

谷深く岩山高き^{すがた}貌にも造りし人の心をぞしる

書かれた歌も、めずらしく狂歌ではないようだ。

(井七恵)



おうちだに 樗谷神社東照宮大権現

樗谿神社は鳥取市上町の樗谷の谷奥にある。この神社は初代鳥取藩主である池田光仲が、徳川家康を祀るために創設した。光仲は、慶安元年（一六四八）に鳥取藩へお国入りするとすぐに、曾祖父である家康が祀られている東照宮を鳥取に分霊することを考え、慶安三年四月に本殿を完成させた。同年九月一六日に東照宮の神体が鳥取に入ったことを祝う遷宮の儀式が行われ、一七日には東照宮祭がとりおこなわれた。光仲は一六、一七日の両日とも参拝して儀式に参加し、その無事終了を喜んだといわれている。建立二年後の承応一年（一六五二）九月には、鳥取全藩士と城下町民が参加した盛大な神事が行われ、この祭りは以後恒例となった。しかし明治に出された神仏分離令の影響で規模が次第に縮小され、廃止されてしまった。その後地域の人々の力によって樗谿神社創建三五〇年の節目に祭りが復活され、現在でも毎年秋に権現まつりが行われている。

樗谿神社は、江戸時代には「東照宮」、「東照大権現」と称されたが、明治七年に社名が現在の「樗谿神社」と改称された。樗谿神社の「たに」という字には、谿谷の「谿」という字が使われているが、神社がある樗谷の地名には簡単な「谷」の字が使われている。無駄安留記には、「樗谷神社東照宮大権現」と記述しており、地名と同じ簡単な漢字で書かれている。樗谿神社に祀られているのは徳川家康の神霊だけでなく、明治七年に池田忠継、忠雄、光仲を、明治十一年には、最後の鳥取藩主であつ





た一二代池田慶徳の神霊を合わせて祀り、今に至っている。

無駄安留記には、禰給神社の入り口に建っている鳥居が描かれている。現在この鳥居は、絵が描かれた当時とは別の場所に移されている。そのことは、『鳥府志』に「是より中の御門まで式町の間、両側に杉・桜の並木あり」とあることから分かる。現在、鳥居と御門はとも近い場所に建っているが、資料には鳥居から御門までは二町（約三〇メートル）離れていると書かれてあるからである。

御門をくぐって二〇〇メートルほど敷石の道を進むと、大きな隨身門が建っている。この隨身門から本殿へと昇る石段までの参道の左右には、二〇基の石燈籠が並んでいる。無駄安留記には、「太夫家ヨリ石燈籠ヲ献、数十箇路傍ニ連立ス」という記述がある。この燈籠は、本殿が完成した慶安三年に、鳥取藩の上級家臣一四名から奉納された。それぞれの燈籠には、奉納した家臣の名前が書かれている。『鳥府志』に載っている略図を見ると、現在も全く同じ形で残っていることが分かる。

石段を登ると本殿がある。本殿の左右には、光仲の子供である松平新五郎から献上された石燈籠二基が建っている。この本殿と、拝殿、幣殿、唐門が国の重要文化財に指定されている。無駄安留記にも、建物の美しさが「莊嚴美麗」と表現されている。

（松井 陽子）

↗ 禰給神社・随心門
↑↑ 石燈籠
↑ 『鳥府志』の燈籠図
↓ 禰給神社・鳥居



龍峯山興禪寺

鳥取市栗谷に龍峯山興禪寺というお寺がある。実はこのお寺、調べていくと名前も場所も何度も変化している興味深い寺なのである。

まず、現在の興禪寺について、『鳥取県の地名』の記述をみる。

栗谷の中ほど、栗谷川北岸の山裾にある。龍峯山と号し、黄檗宗。本尊は釈迦如来。鳥取藩池田家の菩提所であった。

次に、この寺の歴史について触れていきたいと思う。まず、興禪寺はもともと何の為に建てられたお寺かということだ。話は天正一二年、一五八四年にさかのぼる。小牧・長久手の戦いで戦死した美濃大垣、今でいう岐阜県大垣市にあたるが、その城主池田信輝の子、之助の菩提の為に建立された。当時の呼び名は龍峯山興禪寺ではなく、龍峯山広徳寺であった。開山は京都妙心寺の湖叔宗永である。現在鳥取に位置する興禪寺だが、実は岐阜県から始まったのである。ここから移転は続く。次に池田家を継いだ信輝次男の輝政が三河、今の愛知県であるが、に移つ



た際にこのお寺も一緒に移った。このとき、創立者の湖叔が遷化され、しばらくお寺の僧がいなくなるが、その後現在岐阜市にある加納大宝寺の菊潭^{きくたん}をお寺の住持に迎える。住持とは、お寺の長である僧のことである。このとき輝政は、名前を広徳山龍峯寺に改めて、開祖も菊潭とした。菊潭については、『鳥府志』に詳しい記述がある。

開祖菊潭は、本、甲斐国武田信玄の菩提所恵林寺の弟子なり。天正年間勝頼没落の時、秋田城介信忠公の旨に背き、恵林寺を焼討にせられし時、菊潭もその囲みの内に在て、俱に火宅に身を焦さんとしせし処に、師の命黙止難事ありて（この部分原文は漢文、此囲みを出で、遂に命を全うせしとかや。後年、池田輝政公参州吉田へ御在城なされし比、菊潭吉田に來り、八田広徳院の本願に依て、龍峯寺を開創すと云々。

龍峯寺の開祖となる前に、菊潭は、秋田城介信忠公に背いたのを理由に、自分のお寺を焼かれてしまう。しかし、菊潭は囲みを逃れて生きながらえ、師の命令を最後まで実行したということである。

その後も池田家を受け継いだ人たちによって、姫路（輝政のとき、関が原の戦いの功績による）、岡山（輝政の息子、忠継のとき）へと移る。現在の鳥取栗谷に移ったのは、池田光仲のときである。光仲は忠継の弟、忠雄^{ただかつ}の跡取り息子である。寛永九年、一六三二年に光仲と鳥取の池田光政との間でお国替えが起こる。このとき龍峯寺も鳥取へ四度目の移転をする。このとき鳥取城下にあった国清寺が龍峯寺となった。元禄七年（一六九四）には、広徳山龍峯寺の寺号は京都の妙心寺に返され、新しく鳥取市栗谷に現在の龍峯山興禪寺が建てられたのである。この寺には輝政、忠継、忠雄らが祀られた。この辺りの内容については『新修鳥取市史』に記述がある。

鳥取栗谷にあり、藩主歴代の菩提寺である。元禄六年（一六九三）の創建である。龍峯寺を臨済宗妙心寺派に返すにあたり創建されたものである。黄檗宗で寺領二百石、格式待遇すべて淳光院に準じた。

さて、ここで無駄安留記を見ていこうと思う。といっても無駄安留記には、興禪寺に関する細かい記述がない。ただ、竜峯山弘善禪寺と書かれているのと、絵があるのみである。ただ、無駄安留記の絵では橋が二つ架かっているのに対し、現在の写真では右側の一つだけである。

絵については興禪寺の庭園のものである。『鳥取文化観光事典』に庭園とその周辺に関する記述がある。

書院の庭園は蓬萊式觀賞庭園で、借景にシイの木を主体とした常緑樹の自然林を生かし、幽玄な深さを感じさせる。前庭には杉ゴケが庭一面に伸び、京の庭を思わせる。この庭が作られたのは江戸前期であるが、所々に室町時代の作風がよく生かされており、典型的な書院庭園の名園である。

また裏山には渡辺数馬、白井本覚の墓、庭の隅にはキリシタン灯籠、山門のそばには俳人・尾崎方哉の句碑がある。なお、庭内に残るキリシタン灯籠は、この寺の裏山にあった切支丹福田家老の墓地にあった礼拝物である。灯籠の竿だけはとなったが、貴重な信仰遺物である。

（岸本 美沙）

犬橋・犬塚

犬橋・犬塚は現在の鳥取市浜坂にある。この犬橋・犬塚であるが、名前の由来にはちよつとした伝説がある。無駄安留記によると、それは次のようである。

現在の犬橋のあるところには、当時丸太が一本しか架かつておらず、大変危険で旅人達が難儀していた。そしてそれを見かねたある村人が嘆いて、何とかしようと考えた。そこで、人の言葉がわかる犬に「この危険な橋を土橋にし、万人に快く渡らせたい。そこで首に袋をかけ、道で

往来する旅人に金を乞いなさい」と諭した。犬はしつぽを振って承

諾し、翌朝から路頭に出て旅人の裾をくわえて金を乞い、与えなければ裾を離さなかったそうだった。ついに金が貯まると立派な橋をかけ、そしてその犬が死ぬと人びとは犬のために祠を建てたそうだ。

この伝説から、犬橋・犬塚という名前がついたということである。鳥取にまつわる伝説の本等を調べてみると、この伝説はよく見かけられるので、浜坂周辺の人達

なら知っておられる話かもしれない。

犬祠は『因幡志』に絵となつて載っているが、現在残っている石碑と違つて祠、つまり小さな家のようなものである。無駄安留記には「犬の秀倉」とも記述されている。また、犬橋も当時のとは位置が違い、現在のほうがやや上流にあるようである。

人の為に橋を掛けたる犬もあり 人わづらわす人や何なる

無駄安留記の作者による狂歌である。「人のために橋を架けた犬もいるのに、人を困らせる人はどういふことだろうか」という意味である。作者は何十年もかけて鳥取中を歩きまわり、そしてきつとたくさんの事を考え巡らせたのだろう。もしかしたら現代の私たちのように、作者も人間関係で悩むことが多かったのかもしれない。

(前川 裕次)



元交が江戸^{いど}

森元交は、現在の玄好町辺りの川端で開業していた医師である。鳥取藩の藩医として出仕しており、藩主の江戸参勤にも同行した。腕が良い医師で、江戸での医療も評判がよかったそうである。生没年ははっきりしていないが、慶長（二五九六―二六二五）の始め頃に生まれ、延宝年間（一六七三―一六八〇）に八〇歳くらいで亡くなったといわれている。

戦国時代末期にキリスト教の伝導が日本で盛んとなり、それに伴って西洋医学も伝わった。多くの医師が、日本医学のなかにすぐれた西洋医学を取り入れたいと考えキリスト教に入信した。元交もその一人であるといわれている。

江戸時代になってキリスト教徒に対する弾圧は激しくなった。元交は寛永一三年（一六三六）に鳥取で捕らえられて入牢し、寛永一五年に江戸に送られた。江戸での取調べは厳しいものであったと伝わっている。元交は、キリスト教に入信したのは医学を学びたい一心からであり、布教には関知していないと主張し続けた。無駄安留記をはじめとする様々な資料に、次のような話書かれている。

ある日役人は、元交を仰向けにさせて臍の上に土を塗り、そこに火をつけるという拷問を行った。火がさかんに燃え、元交は「ああ合点がいった」と言って気絶してしまった。役人は火を消し、元交になぜ合点がいったなどと言ったのか問いただしたところ、「氣海の灸に効能があるのか」と不審に思っていたが、今火責めを受けて腹の中に火気が通った時、はじめて灸に効能があることが分かり、思わず合点がいったと申したの

です」と答えたそうである。役人たちも、このような拷問中でさえ医学のことばかりを考えているのだから、真のキリスト教徒ではあるまいと考え、元交を江戸の町へ釈放したそうである。

元交は釈放された後に鳥取へ帰ったという資料もあるが、明らかではない。無駄安留記には、袋川堤の元交の屋敷があったあたりを「元交が江戸」といい、その内土手にそった場所に元交の墓がある、と書かれている。墓には石塔がなく、「二本の榎の樹を植、此処の竹木、方七八尺が間、竹木伐ても忽ち祟ると云。」とあるが、はっきりとした場所は特定できなかった。

（松井 陽子）



元交の屋敷があったとされる付近の袋川

桂蔵坊、山伏の井戸

桂蔵坊は鳥取の昔話に登場する有名な狐である。この昔話は、様々な資料や、子供向けの昔話の本などにも記載されており、鳥取の人にとっては馴染み深い話のようだ。その昔話とは次のようなものだ。

昔、鳥取城の中坂に桂蔵坊という狐が住んでいた、この狐はとても足が速かったので、鳥取城のお殿様は飛脚の変わりに桂蔵坊狐を使い、手紙などを運ばせていた。あるとき桂蔵坊が江戸への使いの帰りに、播磨はりま（現在の兵庫県）のとある村を通ると、獣を捕らえる罠に鼠が仕掛けられていた。そのおいしそうな匂いに我慢できなくなった桂蔵坊はつい鼠に噛みついてしまい、そのまま罠にかかり死んでしまった。桂蔵坊の帰りが遅いのを心配したお殿様が、祈祷師に桂蔵坊のことを占わせると、祈祷師は「桂蔵坊は播磨で罠にかかって死んでしまったようです」と告げた。桂蔵坊を大変哀れんだお殿様は、鳥取城内の中坂に桂蔵坊を祀る神社を建てた。これが現在の中坂神社である。

この話と同じように、ほとんどの昔話の中では、桂蔵坊は狐として描かれているが、無駄安留記には、「昔桂蔵坊と云山伏、死して中坂に葬たる也」「桂蔵坊も善祥坊に従ひ当処に來り城内に居住したるや」とあるように、桂蔵坊は鳥取城主宮部善祥坊配下の山伏だったと記述されている。『鳥府志』にも、「慶蔵坊」と、字は異なっているが内容的には同じことが記述されている。

山伏の井戸に関しては『鳥府志』に「又山上に山伏の井戸と云へるは、彼桂蔵坊などが堀りたる井ならんや」とある。無駄安留記にも、桂蔵坊に関する記述と一緒に、「山伏の井戸と云水溜まり、大井なり。此人など住居せし時堀たるものか。」とあり、二つの資料の内容は良く似ている。このことから無駄安留記の桂蔵坊と山伏の井戸に関する記述は、『鳥府志』を元にして書かれた可能性が高いと考えられる。

（米村 祐紀）



中坂神社

鼠倉

鼠倉は無駄安留記によれば大路山（二〇五メートル）の麓の岸根にあるとされていた。大路山は、JR津ノ井駅の近辺、国道二九号線沿いにある山である。また、山裾には東大路神社がある。

『稲葉民談記』によると「因美郡大呂村の山の麓岸根にあり。昔此処に鼠とも集まり居て貴賤主従のありさま男婦夫婦のかたらひをなし家くらを立、財宝をならへ市町売買人間浮世の渡をひをななふ此処を鼠のかくれ里と云。鼠は北方の獣佛家には大黒天取属特に福分の生類也と云。伝教大師叡山に鼠のほこらを勧請し大黒天を祭れり。加様の因縁により鼠のすみかには米穀財宝ゆたかにして其変現人間の富貴のまねひをなすと云伝ふ。」とあり、無駄安留記の「鼠倉」の記述と大変類似している点から、逸處はこれに拠ったものではないかと推測できる。

大路山の周辺にはかつて東麓に東大路村、南麓に中大路村、そして西麓に西大路村が位置していたが、『因幡志』の東大路村の項には、「戸数十三、この内茶屋五軒あり。氏神荒神（素戔鳴尊）云々。八頭郡若桜町に通ずる街道にして村はずれに里堡あり、鳥取より一里のしるしなり。村の後の孤山を大路山と号す。（中略）またこの山の北麓に鼠窟あるいは鼠倉、また鼠の隠れ里ともいう舊蹟あり。今は土覆いてその形無し。土人いう、上古この窟に鼠群をなし、群中貴賤主従の品わかれ人間のありさまの如しと。古今奇異の一説なり云々。」とある。登山口の東大路神社は、荒神社で、祭神がスサノオノミコト、そして東麓は若桜往来で東大路村に茶屋が五軒あったという。ここは鳥取から四キロで一里塚もあり、さ

らに北に聳える久松山頂を結ぶ線が古代条里の南北基準線であったとされている。周辺には円墳二〇基からなる大路山古墳群が知られている。また『因伯民談』によると、あまのじやくのこぼした土によって、大路山と雲山（面影山の隣に位置し、約六三メートルの山）ができたという民話も残っており、鼠倉の物語と合わせて大路山は伝説の山であったといつてもよさそうである。

鼠倉伝説には続きがある。すなわち、人間同様の生活を営んでいた鼠たちのすみかに、面影山の麓に住んでいた老婆が訪れてご馳走になったが、その時に出された人魚の肉だけは食べることができなかったのが、こつそり懐に入れて持ち帰った。老婆の娘がそれを見つけて食べ、八百年も娘のままで生き続けることができた。そして彼女は八百比丘尼と呼ばれ語り継がれている、というものである。この話は「鼠浄土」、いわゆる「おむすびころりん」の類型であると考えられる。あるいは、まれびと信仰の類いとも思われ、異郷の先進文明の人は福をもたらすと考えられていたことに起因する話だろう。鼠は必ずしも益獣とはいえないが、様々な災害を予知するものとして注意が払われており、また福の神である大黒天の配下として、富を運んでくる福ある動物と見なされ、特別視されてきた。鳥取の鼠倉伝説の場合は、寿命という有限の宝を多く授けてくれる存在として、まさに大路山は庶民にとって「福の山」であったようである。

（小川千賀子）

道光坊墓

道光坊の墓というのは源兵衛茶屋の背後の山腹にある。実際調査に赴いてみたところ、墓にたどり着くまでの道は細く急な斜面となっていて参拝しやすい場所とは思えなかった。しかし特に寂れた様子もなく、現地の方の話では現在でもときおり参拝者が訪れるようである。

道光坊というのは、豊臣秀吉が鳥取城を攻めたときに摩尼寺の住職をしていた道光和尚のことであり、無駄安留記には以下のように記述されている。

是摩尼山下源兵茶店の前、墓数区の傍らに在。不動明王と誌す。墓何世よりか旁壊れて、大白骨視ゆる。むかし豊公久松城の時、本陣山に、摩尼寺住持道光坊を招き饗して、留主に卒をひそかに遣し、寺に放火す。道光坊ふと摩尼山の方を顧視し、仰天し、疾く走り返る。途にかの火をつけし卒に往会ふ。即ち力戦して兵卒を投げ殺す。後に此処に入定せし由。大力僧なりけると。強勇也。

このことは『摩尼寺帝釈天王縁起』や『因幡志』にも詳しく記載されており、しかしまた『摩尼寺帝釈天王縁起』と『因幡志』の記述も所々異なっている。

参考までに主な箇所をあげてみると、年代の違い、道光和尚が出会った兵士の数の違いなどがある。兵士の数については資料が見当たらないので、どちらものが正確であるかは定かではないのだが、摩尼寺が焼かれた年が天正九年（一五八二）であったことを考えると、『摩尼寺帝釈天王縁起』に記述された天正八年（一五八〇）は誤りである可能性が高い。

道光坊の伝説を簡略に示してみると以下のようになる。

天正九年、豊臣秀吉が摩尼山に陣をつくらうとしていたが、摩尼寺の住職であった道光和尚が攻め込まないように寺と山を守護していた。そこで豊臣秀吉は道光和尚を本陣に招き、もてなして、その際に摩尼寺に火を放った。秀吉の策略にはまったことに気づいた道光和尚は急いで寺に駆け戻り、その帰り道で寺に火をつけたであろう兵士に出会うと手





近にあった松の木を引き抜いて、それで兵士たちを殺してしまう。しかしそのような道光和尚の働きもむなしく、結局摩尼寺は燃えてしまい、本尊であった帝釈天像も行方知れずになってしまうのだが、その後谷の向こうから発見され、このときから帝釈天像が火を避けた谷を「飛渡谷」と呼ぶようになった。このように本尊は無事だったが、道光和尚が秀吉にだまされて寺を焼かれたことによりはなくなり、このことを口惜しんだ道光和尚は寺の近くの山中に自ら穴を掘り、その中に入って死んでしまった。

現在、道光和尚が入定したとされる場所には、不動明王と刻まれた石碑がたつていて、このような石碑が建てられた経緯についての話にも幾つかのパターンがある。『因幡志』にはこの辺りのことは詳しく記述されていないのだが、『鳥取県伝説集』は道光和尚の入定から二〇〇年後の安永五年（一七七六）に山崩れが起き、その後崩れた石窟を元通りに直す時に入り口の小さな穴の前に「不動明王」と刻んだ石碑を建てて、墓じるとしたというもの。そしてもう一つは摩尼寺帝釈天王縁起に記述されている、明随沙弥という僧侶の夢に現れた道光和尚が力を授けるかわりに自分を不動明王に祝い込めるように、と言ったというものである。

現在となつてはどういう経緯で石碑が建てられかを正確に知ることは出来ないが、石碑が移転したとかいう資料や話は聞くことができなかったため、恐らくは現在墓がある場所が、道光和尚が入定した場所であると思う。ただ何度か建て替

えは行われたようで、現在の石碑は非常に新しいものに見る。昭和二年の丹後地震の影響を受けた際にも建て替えられたそうである。このように道光坊の墓は幾度も建て替えられたり、今でも参拝者が訪れるような墓であるわけだが、無駄安留記に「墓何世よりか^{かたえや}旁壊れて、大白骨視ゆる」と記載されているが、何があつたのかは現在調査中であるが、幕末の時代の道光坊の墓は現代とは違って参拝者が少なく荒れていたのではないだろうか。

また、無駄安留記の絵の中にも道光和尚の墓らしきものが描かれて、その隣に「道光墳」と記されているのだが、実際には絵と同じ場所に道光和尚の墓があるとは言い難い。

確かに、源兵衛茶屋の裏に歴代住職や僧侶の墓がいくつも並べてあり、絵のような感じになっているのだが、道光和尚の墓は他の墓と同じ場所にあるとは言えず、少し離れた場所にぽつんと一つ建てられているという状況なのである。絵のような幾つかの墓の中にまぎれているということはないのだ。

そこで考えられることは、絵の中に記された道光墳とはそもそもこの絵にある墓のことを指すのではなく、絵にある山全体を指して道光墳としているのではないだろうか。

もしこれがそういうことならば、位置関係に関する問題はなくなるのであるが、それを立証するには無駄安留記に記された他の「墳」の文字についての使い方をもっと詳しく調べていかないといけないと思う。

（神垣 浩平）

田ノ嶋村・毘沙門堂

田ノ嶋村は現在の鳥取市田島^{たしま}と呼ばれている辺りだ。『因幡民談記』では「田野島」とも記されている。

毘沙門堂は、昔は多聞山今滝寺といって、田島村八幡宮の神宮寺だったそうだ。『因幡志』には「多聞山神宮寺（本尊毘沙門天）」として掲載されている。『雪窓夜話』によると、永禄年間（一五五八～一五七〇）の戦乱で神宮司は廃絶したが、慶長元年（一五九六）に密宗の僧侶である頼賢という人物が跡地に泊まった時に、井戸の中から神宮寺の本尊であった毘沙門天の像を発見し、彼を開基として草堂毘の沙門堂が建てられたそうだ。元禄年間（一六八八～一七〇四）に、行性という浄土宗道心者が、荒廃していた草堂を建て直し、新たな毘沙門天像を彫り、その中に古い像を作りこめたそうだ。享保一五年（一七三〇）に、修験者の福寿院が毘沙門堂を新築したという。『鳥府志』には「本堂造建の事、多年の企なりけるが、文政年間、その時至りて、魏々たる堂宇を営みたり」ともある。

『鳥府志』には、「例歳三賀の日には、恵方参りとして参拝の男女夥し」とあるが、現在はあまり人は訪れていないようだ。

現存する建物はとても新しいものだが、建物の中の仏像や護摩などは歴史を感じさせるものであった。今では旧正月の時期だけ開いているらしい。

現在、毘沙門堂は田島地区の住民の方が管理をしている。

（井七恵）

